

令和 4 年 5 月 30 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K04099

研究課題名(和文) マンハッタン計画歴史記念公園が創造する集合的記憶

研究課題名(英文) Representation of Collective Memories in the Manhattan Project National Historical Park

研究代表者

榎本 智子 (Masumoto, Tomoko)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：00337750

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：米国内外でも賛否両論の末に認可され、2015年に設立されたマンハッタン計画国立歴史公園が、何を展示し、人々に伝えていこうとしているのかを準備期間も含めて研究を行った。関係者へのインタビューを行い、現地で展示物が何を表象しているのかを検証した。ロスアラモスにある歴史公園のガイドがどのような話を選び、語るのかについても分析を行った。来訪者により科学者の逸話や当時の研究についての語り分けがされていた。科学の重要性から未来につなげた語りも見られた。被爆者の話も取り入れようという試みはあったものの実現には至らなかった。そのことも含めて現地での集合的記憶に取り入れられるもの、排除されるものが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

博物館や国立公園を議論の場とする、ということは歴史の側面を多角的に見ることができる点では有益だが、それは、最初の原爆開発と人類初の原爆被害の両者を提示することで成り立つ。関係者へのインタビューから広島・長崎の記憶を組み入れることが目的の一つであったが、現地での講演会実施、参加者との対話を実現することができた。原爆投下後の情報の落差が実際に大きいことが確認できたこと、それを説明することができたことも意義があった。また、研究結果はアメリカの学会で発表することにより、同じ分野のみならず、歴史学、文化人類学や社会学の専門家とも意見を交わすことができ、研究の着目点を広げることができた。

研究成果の概要(英文)：The Manhattan Project National Historical Park was established in 2015, following a controversy in the U.S. between proponents of the park and those opposed. The research presents a review and analysis of what is represented in the park and narratives about the Manhattan Project in signage and texts on exhibits and through interviews with park representatives, including what park rangers say to visitors. Stories of the challenges and success in the science and engineering needed to create the first atomic weapons, with a theme of patriotism during the war. An effort to include the effects of the bombs on the Japanese and stories of survivors failed to be included. The research also describes the role of the Manhattan Project and the efficacy of the bombs as part of the collective memory in the U.S.

研究分野：コミュニケーション

キーワード：原爆開発 マンハッタン計画 国立歴史公園 集合的記憶

## 1. 研究開始当初の背景

原爆開発において中枢となったニューメキシコ州ロスアラモス、ワシントン州ハンフォード、そして、テネシー州オークリッジの関連施設はマンハッタン計画国立歴史公園化法により、2015年に国立歴史公園となった。この国立歴史公園化は過去にも成立に向けての動きがあったが、成功はしていなかった。今回もアメリカ国内外から人類に対して初めて使用された原子爆弾の製造場所を国立公園にするということに対しては賛否両論の意見が多数寄せられた。特に、広島と長崎をはじめとする日本からの反対の意見がメディアでも多く取り上げられていた。

マンハッタン計画の国立歴史公園化法案成立に向けて尽力を尽くしてきた Atomic Heritage Foundation 所長のケリー氏によると、国立歴史公園化は世界の叢智を結集した科学的成功の歴史を保存するためのものであるという(2013年度研究者によるインタビューより)。設立当時のジャビス米国内務省国立公園局長も、「歴史的遺産への理解を深め、世界を変えた著しい科学と技術の進歩と戦時下におけるアメリカ国民が力を合わせた物語を伝える」と述べている(広島市報道資料、2015年5月8日)。短期間で若い研究者達が秘密裏に存在を隠されていた場所に集められ、不便な環境の中で協力をして不可能を成し遂げた成功物語という語りは原爆投下以来続いている。反対派の意見としては、現在でも核兵器の関連施設である場所を子供を含む幅広い世代が訪れる国立公園とすることへの懸念や被爆者への配慮の問題などが挙げられていた。このような議論がある中で国立歴史公園法案は成立し、三年間の準備期間を経て開園することとなった。

本研究の背景として、挑戦的萌芽研究(2012年度)でロスアラモスの科学者の原爆に対する見解を調査した。ロスアラモスの原爆の語りは1945年7月16日にトリニティで行われた原爆実験の成功で終了している。広島、長崎への原爆の投下と戦争終結はその結果に付随するものとして表象されている。それは、「ロスアラモスでは開発をし、政治的な決定はワシントンで(政治家が判断をする)」という語りにも現れている。

原爆の正当性に賛成する人の数は、米国でも確実に減っている。時代の変化に期待を持つ一方で、関連する人々の立場や思惑が複雑に入り組んでおり、どのような形で実現をするのかは明確にはされていない状態であった。米国大統領初の広島訪問と核廃絶へのスピーチの影響も少なからずあり、いかに関係機関が影響しあい、歴史記念公園が何を表象するのかを調査するのに重要な時期であると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の主な目的はマンハッタン計画国立歴史公園が何を伝えようとしているのかを検証していくことである。異なる歴史観、異なる見解を持つ関係者が複雑に絡み合い、歴史公園が何を表象しようとするのかは立場によって異なってくる。設立計画提案書の作成段階では日本の識者も含めた話し合いがなされており、原爆投下による被害についても取り上げられている。話し合いの段階でさまざまな意見を取り入れた結果、それがどのように表象されているのかを調査することである。

そして、マンハッタン計画歴史公園が開園した時に、レンジャー(ガイド)がどのような話を選び、語るのかを分析していくことで、来訪者に何を伝えようとしているのかを検証していく。展示物や歴史的な「場」に語り部が選ぶ話で新たな集合的記憶が作られていく。

国立公園や博物館を「議論の場とする」とした関係者の言葉をもとに、地元の大学での授業にゲストスピーカーとして参加することにより、マンハッタン計画の成功の影となっている事柄について学生と意見交換をしていく。関係者との対話を通じて、ロスアラモスのマンハッタン計画国立歴史公園に、語られることがなかった広島・長崎の記憶を組み入れていくことを目指した。

### 3．研究の方法

本研究の研究期間はマンハッタン計画国立歴史公園の設立準備とも一部重なっている。準備期間中にどのような構想を持ち話し合いがなされたのか、各関係者へのインタビューを行う。また、マンハッタン計画国立歴史公園での現地調査を実施した。

### 4．研究成果

マンハッタン計画歴史国立公園は国立公園の中でもめずらしい離れた3つの州に位置している珍しいものである。その中心となっているのは最終的に原爆が製造されたニューメキシコ州ロスアラモスで現地調査を実施した。ロスアラモスにおける国立公園はロスアラモス研究所に付属するブラッドベリー科学博物館とロスアラモス歴史協会が共同運営をしている。科学博物館長、ロスアラモス歴史協会の博物館長、公園の設立と運営に携わるロスアラモス郡の関係者、そして、Atomic Heritage Foundation 会長へインタビューを実施した。ロスアラモス郡の広報担当者とのインタビューでは、ロスアラモスの町全体が科学者の町であり、また、核ミサイルなどの兵器製造や冷戦時代のイメージが残っているが、そのイメージを変えるべく、歴史上の「偉大な発見」がされたという面を強調しようとしていることがわかった。また、ロスアラモスが自然に恵まれた場所であり、「閉ざされた秘密の場所」だけではなくアウトドアが盛んなことをアピールすることにも力を入れていることがわかった。

科学博物館では兵器製造の拠点という部分だけではなく、環境問題の取り組みや宇宙開発の展示の部分も強調をしていた。マンハッタン計画歴史国立公園に指定された時から地元の学生の協力を得て、若い世代にも伝わる展示の仕方を取り入れるプロジェクトも実施をしており、過去の展示の仕方から、より若い世代に伝わる工夫が見られた。しかしながら、国立公園設立時に批判があった原爆投下後の広島や長崎の被害について、どのように取り入れるのか、ということに関しての議論は進んでいなかった。ブラッドベリー科学博物館はロスアラモス研究所の付属であることから、「科学の発見、発達」に重点を置くことは立場上方針の変更は今後も起こらないであろうと考えられる。

ロスアラモス歴史協会の博物館長は調査インタビューへの協力を依頼してから、本研究者のネットワークを通じて様々な試みをしようとしていた。館長や理事メンバーが広島と長崎を訪れ、原爆の日の式典に参加し、地元の関係者との交流を深め、その後、広島平和記念資料館の館長や関係者をロスアラモスに招き、博物館での原爆被害者の遺品を展示する企画が進められていた。しかし、歴史協会の理事会決定により展示が中止となった。協会の会長によると展示の実施に関する契約はされていなかったため、中止ということにはならないということであった。協会長へのインタビューを行った時に、引退した科学者が多く住むロスアラモスで彼ら・彼女らがいる限りはそのような企画の実施はできないということ話を話していた。そのような展示は国家のために尽くしてきた科学者達の名誉を傷つけることになるということであった。地元民の感情を考えてのことではあったが、スミソニアン

航空博物館での全米の退役軍人を中心とし、政治家も巻き込んだ原爆展の中止と重なる部分がある。ロスアラモスという土地が語る歴史は注意深く選択されながら創造されていることを確認することができた。国立公園指定のための調査段階では、日本の関係者との話し合いの場を持ち、提案書の中にわずかではあるが、被爆の状況についても触れられている。

企画の段階の関係者である前国立公園長官とのインタビューからは、近年は積極的にマイノリティーに関連する場所や負の遺産となっている場所を国立公園化し、歴史の継承に力を入れている傾向があることがわかった。日系人収容所を国立歴史公園としたのもその一環である。国立歴史公園を認可するには数年の研究が必要であり、その調査を行った担当者とのインタビューも実施した。国務省に所属していた国立公園局の調査担当が現在はエネルギー省のマンハッタン計画の歴史運営を担当しており、設立当時の報告書や調査協力者についても確認できた。

インタビューから、マンハッタン計画国立歴史公園の複雑な管理、及び、運営の事情が明らかとなった。国務省の役割は国立公園の指定調査と運営であり、エネルギー省は公園内にある核廃棄物の処理を担っている。マンハッタン計画国立公園に指定されているハンフォード（ワシントン州）、オークリッジ（テネシー州）、そして、ロスアラモス（ニューメキシコ州）の三拠点は核物質汚染の問題がある。それに加えてロスアラモスは現在も研究所として国家防衛の機密事項を扱っている。マンハッタン計画当時の歴史的建物も研究所の敷地内にあり、一般への公開はされていない。研究所は国防省の管轄であるので、それぞれ違う管轄の省との調整が難しい。同じニューメキシコ州にある原爆実験成功の地であるトリニティサイトが国立公園の指定に入っていないのも国防省の管轄であることが理由の一つと考えられる。また、国立公園の予算はその時の政権にもより、設立計画時から準備期間の間に予算が削減されたこともあり、予定通りの準備はできなかったという事情があることがわかった。

設立計画提案書の段階では日本側の意見も組み入れ、原爆による被害についても触れられており、近年の国立公園指定に見られるマイノリティーへの認識もされていた。実際、オークリッジでマンハッタン計画を支えた女性職員達は以前よりも大きく取り上げられるようになった。しかし、マンハッタン計画国立歴史公園が開園し、一般の来訪者が見る展示物やレンジャーの話には設立提案書に含まれていたような原爆投下後については全く触れられることはない。国立公園となったことで、マンハッタン計画の関係者について以前よりも多くの逸話が紹介されていた。設立計画の段階で、国際的な議論を理解している企画や運営を担う部署と現直接来訪者と接触する現場との認識の違いが浮かび上がってきた。現場では来訪者が期待するものを見せる・聞かせる、という役割がある。ミュージアムショップで一時は販売がされていなかった原子爆弾の形をしたアクセサリーやキーチェーンも新たに販売されていた。来訪者のマンハッタン計画に対するイメージはさまざまな議論を踏まえて開園した国立歴史公園ではなく、現場で直接触れたものから創造されていく。

世界的に蔓延した COVID 19 により、予定をしていた原爆展の実地調査やインタビューを中止せざるを得なくなった。一年の延長をすることで状況が変わることを期待していたが、その後は国内での実地調査も困難となり、文献調査へと変更をした。研究の成果は国際学会で発表を行い、参加していた歴史学者やアメリカ文化の専門家からフィードバックを得ることができた。研究の発表を国際学会ですることにより、目的は達成できたといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Tomoko Masumoto
2. 発表標題 Dark Tourism and Manhattan Project National Historical Park
3. 学会等名 Southwest Popular/American Culture Association (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Tomoko Masumoto
2. 発表標題 How the places should be remembered?: The case of Manhattan Project Historical National Park.
3. 学会等名 Southwest Popular/American Culture Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Tomoko Masumoto (Maples, David & Aya Fujiwara (Eds))	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ibidem Press	5. 総ページ数 302
3. 書名 Hiroshima-75: Nuclear Issues in Global Contexts	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------